

〈論文〉

‘let’ は「使役動詞」か

葛 西 清 蔵

0. 学校文法では、let は使役動詞の一つとして扱われている。例えば、江川 (1985: 187) では「使役動詞」として let があげられ、山崎 (1951: 465) では「使役動詞」のはじめに let があげられている。本稿は、let のさまざまなふるまいの観察から、let を使役動詞とするのは無理であることを主張しようとするものである。議論は次のようにすすめる。

- [1] to なし不定詞
- [2] to なし不定詞と to 不定詞: to なし不定詞の「同時性」
- [3] 知覚動詞と使役動詞の受動態
 - [3.1] 知覚動詞の受動態
 - [3.2] 使役動詞の受動態
- [4] let のふるまい: let はなぜ to 不定詞をとらないか
- [5] まとめ

- [1] to なし不定詞

まず、つぎの例文を見よう。

- 1. a I saw him go alone.
 - b I let him go alone.
 - c I made him go alone.

(1a, c) において, saw, made が目的語の「補語」として, to なし不定詞 go をとる。このことから (1b) の let を to なし不定詞をとる (1a), (1c) を同類のものとみなし, let を make と同類の使役動詞とみなしていると思われる。以下では, let のさまざまなふるまいから let の特異性を見ていく。

[2] to 不定詞と to なし不定詞: to なし不定詞の「同時性」

上の (1a, b, c) の文から, to なし不定詞の性質をさぐりだしてみよう。

(1a, b, c) のそれぞれの文において, 彼が go するのを saw したのであるから, go の時間と saw の時間は同じ時間帯でなければならない。これは (1b, c) でも同様であり, let, made の時間は go の時間と「同時」ということになる。

この性質は注目すべきもので, たとえば, He agreed to help. のような to つき不定詞では, 'To is used after some verbs, especially when the action referred to in the infinitive is to happen later.' (*Cambridge International Dic. of Eng.*) とあるように, 「agree した後で help する」というように, agree と help は「同時ではない」というように to 不定詞と to なし不定詞には著しいちがいがある。

上では, (1a, b, c) の例文から, 主節動詞と to なし不定詞の動詞の時間帯は「同時」でなくてはならない, ことを知った。ここではさらに, もう一つの特徴を導きだすことができる。(1a) において, 「彼がひとりだけでかける」という事実を 'I' 「私」自身が, 直接自分の目で見えていなくてはいけない(「直接知覚」)ということである。つぎの例文を見よう。

2. I see them to have arrived. (Bolinger 1974a: 77)

ここでは to つき不定詞をとっているが, have arrived というすでに過ぎたことを見ることはできない。「彼らが到着した」ことを「知る」としか解釈できない。To つき不定詞のときの see は, もはや「直接」自分の目で「同時」に知覚したのではない。間接的に「知る」のである。つまり「間接的知覚」(認識的知覚)である。

以上のことから, (1a, b, c) の文でわかることは「to なし不定詞の場合には, 「同時」, 「直接知覚」という性質を持つ」ことである。それをふまえ, つぎの例をみよう。

[3]. 知覚動詞と使役動詞の受動態

[3.1] 知覚動詞の受動態

3. a I saw him go alone.
a' *He was seen go alone.
a'' He was seen to go alone.
b I made him go alone.
b' *He was made go alone.
b'' He was made to go alone.

(3a, b) に対応する受動態の文は (3a'', b'') というになっている。能動態では to なし不定詞であったものが、受動態では, to つき不定詞になっている。ここから, 「学校文法」では, 「知覚動詞, 使役動詞は, 能動態では to なし不定詞をとるが, 受動態では to つき不定詞となる」と教えるが, その説明が与えられることはない。

上で見たように, 知覚動詞でも to つき不定詞をとることがあり, その場合は see も「見る」ではなく, 「知る」という意味になることを指摘した。とすると, (3a'') の He was seen to go alone. のような受動態でも, to つき不定詞をとっているのであるから, was seen は「知られた」となるのではないか, という予想をたてることができる。Mittwoch (1991) は John was seen to leave. という文について, 認識的な解釈だけが可能で 'Somebody saw that John left.' の意味だという。⁽¹⁾

ということは, 能動態とおなじ意味をもつ, to なし不定詞の受動態 (3b') つまり I saw him go alone. に対する受動態, He was seen go alone. はありえない, ということになる。このことは, つぎのように確認できる。

4. a 'there is no verb in the passive that has a bare infinitive' (Quirk et al. 1972: 841)
b 'ungrammatical' (Higginbotham 1983: 124)
c 'not allow passivization of the subject of an infinitival complement to a perception verb' (Bennis and Hoekstra 1989: 37)

ここで見る限り, He was seen go. のような文の存在には否定的である。このことについて Felser (1998: 366) は「perceptual reports には受動態の文はない」と断言し, 'The constraint against passive': the subject of direct perception complements does not passivise' (1988: 366). perceptual reports do not passivise' (1999: 81, 180) という「制約」ま

で提案する。

受動態の主語は動詞によって、なにかの「影響」を受ける (affect) ものでなければならぬ (Bolinger 1974b : 68) ということからすると、知覚動詞に受動態がない、というのも当然である。あるものが「知覚」されたからといって、知覚されたものが「影響」(affect) を受けるわけではないからである⁽²⁾

[3.2] 使役動詞の受動態

3.1 の議論は知覚構文についてであり、使役構文についてではない。使役構文についてはどうであろうか。

荒木・安井 (1992) では「迂言的使役動詞」として have, make, get, cause, let, force, help, ..などをあげている。「使役動詞は能動態で to なし不定詞をとる」と教えるが、この使役動詞のなかでも cause, force などは、能動文でも to つき不定詞をとるし、help は能動文でさえ、to なし不定詞、to つき不定詞のどちらもとる。「知覚動詞・使役動詞は能動態で to なし不定詞をとる」というのはいかにも不正確ないいかたである。

つぎの例でこのことを確認しよう。

- 5. a I made him go alone. (=3b)
- b He was made to go alone. (=3b'')
- b' *He was made go alone. (=3b')
- c I forced him to go alone.
- c' He was forced to go alone.

(5a) に対して (5b) が許容され、(5b') が許容されないということは、(5a) が、「彼が行く」のと make されるのが「同時」であるのに対し、(5b) では、強いられた結果として「行く」ということを示している。(5b') では、「行く」のと「強いる」のところが「同時」であり、これは事実としてはありえないので非文になる。(5c, c') では、いずれも force の結果 go するのであるから、force のあとに go するので、これらの間に時間差があり、to がつく理由が明らかになる。

これで、「知覚動詞、使役動詞は to なし不定詞をとる」ということの一部が説明できたということになる。ここではじめて、'let' は使役動詞か、という問題に立ち返ることが出来る。

[4] ‘let’ のふるまい：let はなぜ to 不定詞をとらないか

- 6. a I will let you come with me.
- b The farmer let us pick some of the apples.
- c *They were let (to) stay a while.
- d *The matter cannot be let to rest here.
- e He wasn’t allowed/ *let to enter the church.
- f (NOT I wasn’t let…)
- g WARNING: there is no passive form of *let*

能動文で、to なし不定詞をとる (6a,b) は許容されるが、Palmer (1987 : 195) は (6c) を、小西 (1999 : 36) は (6d) を非文としている。(6e) で Declerck (1991 : 488) は ‘*Let does not normally passivise*’ という。(6f) では、Swan (1995 : 37) は *I wasn’t let…* を非文とする。(6g) で Cobuild は、はっきり let は受動態はない、という警告を発する。⁽³⁾

これはどういう理由によるのであろうか。安井 (1996 : 114) の ‘causative verb’ (使役動詞) の項には、「主体の動作が相手や対象物に一定の変化や影響を及ぼすような使役の意味をもつもの」(下線引用者) とある。また語義としては ‘let’ には ‘not prevent or not forbid’ (OED), また ‘to allow (something to happen or someone to do something) by not doing anything to stop it from happening’ (*Cambridge Dic. of Eng.*) (下線引用者) とある。とすると、先にあげた例 *I let him go alone.* において、「私」は「彼が一人で行く」のを妨げなかった、ということであり、「彼」にたいして、「私」が何らかの「影響」(affect) をしたわけではない。「彼」は「私」によって「影響」を受けたわけではない。つまり、「彼がひとりで行く」ままにされたからといって、彼が何ら影響をうけることはないから、(知覚動詞の受動態がないのと同じように)、「let」にも受動態がないことになる。Let が受動態をもたないのはむしろ当然である。

能動態で to なし不定詞をとる動詞について、Quirk et al. (1972 : 841) は hear, see, watch の知覚の動詞と、help, let と make である、とし「使役動詞」という用語はつかっていない。また、Celcia-Murcia and Larson-Freeman (1999 : 653) には「使役構文」(causative construction) をつくる動詞に have, get, make はあるが let は入っていない。

[5] まとめ

以上見てきた let のふるまいからすると、let を使役動詞とみる理由は、「能動態で目的補語に to なし不定詞をとる」という事実以外には見つからない。使役動詞とされる cause, force は能動、受動態ともに to つき不定詞をとる。これらの動詞 cause, force された結果としてある動作・状態になるのである。Let はその後に to なし不定詞をとり、受動態のときの主語が被害などの「影響」を受けることもないし、したがって受動態そのものがありえない。これらのことから見ると let には「使役」の意味があるとは思えない。したがって let を make, cause などの「使役動詞」のなかに入れることには無理がある。

注

- (1) a * She was watched to go out of the room.
b * Bob was watched to beat Harry. (Hudson 1971)

これらの文の非文性は to 不定詞のもつ意味「彼女が冷をでていくこと / ハリーをなぐること / の」にたいして、'watch' には、それをうける「～がわかる」という意味がないためであることは明白である。

- (2) これは重要な点である。He was seen to go alone. は「彼はひとりででかけたのが知られた」は、I saw him go alone. 「彼がひとりででかけるのを見た」の受動態ではないことを示している。これについては葛西 (2004a) を参照。

なお、Bolinger (1974b) には *I was approached by a train. の非文性について、駅のホームでは汽車に接近されるのは当然で、待つ人はなんら「影響」を被らない、という説明がある。

- (3) Biber et al. (1999 : 481) は、受動態は「きわめてまれ」(very rarely) とし、Eastwood (1994 : 139) は、let も受動態は「あまりない」(not often) とのべ、又 Hornby (1957 : 27) も受動態は「多くない」(not much) という。重要なのは Quirk et al. (1985 : 1205) が、'let' の受動態は let go, let fall などの「固定した」(fixed) 表現に許される、としていることである。'let go' の意味は例えば「開放する」とあるように、明白に、目的語になるものに「影響」を与えている。

また、一般的ではないが、He was let to go. を Money makes the mare to go. とおなじく to が弱いストレスを担う、リズムの問題とするものもある。(荒木 1991 : 154)

参考文献

- 荒木一雄 (監修) 窪園晴夫・溝越 章 1991『英語の発音と英詩の韻律』英潮社
Bennis, H. and Y. Hoekstra (1989) 'Why Kaatie was not heard sing a song 'in Jaspers. E. et al. (eds.)
Sentential Complementations and the Lexicon Foris Pub.
Biber, D., Johanson, S. Leech, G., Conrad, S. and E. Finegan *Longman Grammar of Spoken and Written English* Longman

- Bolinger, D. (1974a) ‘Concept and percept’ Two infinitive constructions and their vicissitude’ *World Papers in Phonetics Festschrift for Dr. Onisi’s Kiju*.
- Bolinger, D. (1974b) ‘On the passive in English’ *The First Lacus Forum* 57–76 Newsburhouse
- Bolinger, D. (1975) *Aspects of Language* Harcourt
- Celce-uMurcia, M. and D. Larson-Freeman (1999) *The Grammar Book*
- Declerck, R. (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English* Kaitakusha
- Eastwood, J. (1994) *Oxford Guide to English Grammar* Oxford Univ. Press
- 江川泰一郎 (1985) 『改訂新版 英文法解説』 金子書房
- Felser, C. (1998) ‘Perceptions and control: a Minimalist analysis of English direct complements’ *J. Linguistics* 34: 351–358
- Felser, C. (1999) *Verbal Complement Clauses* John Benjamin Pub. Company.
- Higginbotam, J. (1983) ‘The logoc of perceptual reports: an extensional alternative to situational semantics’ *J. Philosophy* 80: 100–127
- Hornby, A. S. (1976) *Guide to Patterns and Usage in English* Oxford Univ. Press
- Hudson, R. A. (1971) *English Complex Sentences* Amsterdam North Holland
- 葛西清蔵 (2004a) 「知覚動詞の受動態」『英語学点描』 22–35 アイワード
- 葛西清蔵 (2004b) 「使役動詞の受動態」『英語学点描』 36–48 アイワード
- 小西友七 (編) (1985) 『英語基本動詞辞典』 研究社出版
- Mittwoch, A. (1991) ‘On the distribution of bare infinitive complements in English’ *J. L* 26: 103–131.
- Palmer, F. R. (1987) *The English Verb* Longman
- Quirk, R. Greenbaum, S. Svartvik, J. (1972) *A Grammar of Contemporary English* Longman
- Swan, M. (1995) *Practical English Grammar* Oxford Univ. Press
- 山崎 貞 (1951) 『新自修英文典』 研究社
- 安井 稔 (編) (1996) 『コンサイス英文法辞典』 三省堂